
魔導の使い魔

エミリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔導の使い魔

【Nコード】
N2051V

【作者名】
エミリア

【あらすじ】
2人の転生者・うちは一家・inネギまで、うちはサスケ＋αに育てられたネギが18歳の時に異世界・ハルケギニアへと召喚される。

ネギ無双異世界恋愛ファンタジーがここに始まる。

キャラ設定（微FF風ステータス 8／2、一部編集）（前書き）

取り敢えず、設定です。

多分、まともな戦闘をこなせるのは先住魔法を使える元素兄弟やエルフぐらいです。（笑）

ちなみに、この作品は昔書いていたネギま×ゼロ魔の二次小説を編集して投稿してます。

7／25の時点で、アルビオンでのワールド戦くらいまでのストックがあります。編集し次第、随時投稿していく予定です。（姫騎士より投稿率が高いと思います）

が、基本は2人の転生者優先となっています。その点はご了承ください。

キャラ設定（微FF風ステータス 8／2、一部編集）

主人公その1

【名前】

ネギースプリングフィールド
（イメージCV…沢城みゆき 代表キャラ…化物語の神原駿河）

【レベル】

70

【顔立ち】

原作魔法先生ネギま！のナギースプリングフィールドとそっくり（
というか生き写し）

【髪型】

ナッポーヘアー（サスケの影響）

【出身地】

イギリス・ウェールズ

【年齢】

18歳

【性別】

男

【身長／体重】

176.0 cm / 57.5 kg

【種族】

人間

【血液型】

A B

【職業／クラス】

魔導騎士（※1）／魔法剣士

【二つ名】

エレメンタルマスター、焰の錬金術師、炎の王、アイオーン・クロック時の支配者

【血継限界・血継淘汰】

現時点では不明

【特殊能力】

『錬金術』

【得意な忍術】

『水遁』、『風遁』、『雷遁』、『人遁』

【性質変化】

水、風、雷

【得意な魔法】

基本的には雷属性魔法と風属性魔法

【使用可能な属性】

ほぼ全て

【综合能力…潜在能力…運】

5..5..5

【HP（身体エネルギー）】

6520（通常時）／3260（『呪霊錠・裏式』使用时）〔最大値は9999〕

【MP（精神エネルギー）】

820（通常時）／164（『呪霊錠』使用时）〔最大値は999〕

【能力値】

素早さ…40

力…55

魔力（※2）…125

氣力（※2）…108

物理攻撃力…105

物理防御力…72

物理回避…61

魔法防御…87

魔法回避…73

【武装】

武器…アームドデバイス『ストラダ・SLH』サンライトハート（※3）、魔法発動体リング

体…白き翼の団服（※4）アラアルバ

腕…『魔獣の右腕』ジャバウオック・アームズ（※5）

頭…なし

アクセサリー…A・T『炎の玉璽』レガリア、仮契約カード、『口寄せ』の

巻物×6（※6）

※1

魔法戦士系の力量序列で上から2番目の職業。

※2

ステータスの魔力、氣力は魔法攻撃力と氣術攻撃力の意味する。

※3

形状はほぼ武装鍊金に登場する『サンライトハート』そのもの。石突部分に直列型チャクラ式GNツインドライヴが搭載されている。フォルム・ツヴァイ時には形状が『サンライトハート+』へと変化。フォルム・アイン時と同じく石突部分に直列型チャクラ式GNツインドライヴが搭載されている。

ちなみに二人の転生者―サスケside―でサスケが使用していた『ストラーダ』を魔改造したものである為、ネギにとってはサスケからのお下がりであり、命と同じくらい大切な宝でもある。

※4

アラニグラ黒き翼の団服の二の腕部分に白き翼アラアルババッチの刺繍が施されている。

ネギのはD・Graymanの初期アレンver。

※5

あることで失った右腕をうちはサスケ特製義手で補っている。傀儡義手技術、ギミック技術、機械鎧技術オートメイル、大刀『鮫肌』を始めとした生物武装技術を複合させた新機軸の義手。

見た目は普通の人間の腕だが、使用者の意思で形状を変化させられる。『魔獣の右腕ジャバウオック・アームス』の場合はARMSに登場するナノマシン武装『ジャバウオック』そのもの。

※6

マジックアイテム武器や魔法具、小道具が大量に収められた巻物。

キャラ設定（微FF風ステータス 8／2、一部編集）（後書き）

読者の皆様へ

ゼロ魔原作キャラのステータスが決まってません。良ければ、ご協力をお願いします。（笑）

追記

ネギの種族を人間に編集しました。理由は術式兵装の修得を『闇の魔法』^{エレベア}から『人遁』にしようと思ったからです。（『人遁』については2人の転生者－サスケside－参照。）

『人遁』は『血継限界』じゃないですし、副作用も無い設定なので都合がよいと思いました。（笑）

原作キャラ設定募集（前書き）

特にステータスをお書き頂けると幸いです。

原作キャラ設定募集

【名前】

○○○＝○○○＝○○○＝○○○＝○○○
(CV:○○○)

【レベル】

??

【顔立ち】

原作通りorアニメ版通り

【髪型】

原作通りorアニメ版通り

【出身地】

【年齢】

??
歳

【性別】

?

【身長／体重】

○○○.○cm／○○○.○kg

【種族】

人間

【職業／クラス】

??（基本は貴族or貴族子息子女）／魔法使いor魔法戦士or
魔技師

【二つ名】

【得意な忍術】

ネギから教わるか否かでお書き下さい。

【性質変化】

ネギから教わるか否かでお書き下さい。

【得意な魔法（ネギま版）】

ネギから教わるか否かでお書き下さい

【使用可能な属性（ネギま版）】

ネギから教わるか否かでお書き下さい

【魔法系統】

火or水or風or土or虚無or先住

【総合能力…潜在能力…運】

〇…〇…〇（最大値は5）

【HP（身体エネルギー）】

〇〇〇〇〇〔最大値は9999〕

【MP（精神エネルギー）】

○○○「最大値は999」

【能力値】

素早さ…○○○

力…○○○

魔力…○○○

氣力…○○○

物理攻撃力…○○○

物理防御力…○○○

物理回避…○○○

魔法防御…○○○

魔法回避…○○○

【武装】

武器…

体…

腕…

頭…

アクセサリ…

第1話 「使い魔は元・魔法先生」 (ネギ視点) (前書き)

2人の転生者、うちは一家、inネギま同様、視点切り替え方式を採用してます。

が、基本的にはネギ&ルイズ視点です。稀に他のヒロイン候補の視点が登場します。

第1話 「使い魔は元・魔法先生」 (ネギ視点)

あゝ……。取り敢えず、目の前で起こった出来事を話そうか。まず、
ムンドゥス・マギクス
俺は魔法世界の世界崩壊危機を救い、父様とは世界的な意味で別れ、
メルディアナ魔法学校の卒業試験を無事完遂した。これ、結構重要。

そして、俺は特に当ても無く、ムンドゥス・マギクス・ムンドゥス・ウエトゥス
魔法世界と旧世界を旅していた。こ
れも重要。

旅に出た理由は簡単に説明するなら世界を見てみたかったからだ。
父様からはよく“本当の意味での善悪、正義を知りたいければ世界を
見て向き合え”と言われていたからな。

麻帆良学園での教職という立場もアスナさん達が高等部を卒業する
と同時に終了したので、俺も晴れて自由に行動できる様になったっ
て訳だ。

勿論、最初は色々ともめた。卒業試験を完遂すると同時にメセンブ
マギステル・マギ
リーナ連合からは立派な魔法使いとして所属して欲しいと言われた
し、アリアドネー中立国からは魔法学の教職について欲しいという
誘いもあった。

あっ！ちなみに現在のMM元老院はかなり健全な組織だったりする。
メガロメセンブリア
元老院に巣くっていた闇は全て父様達——アラニグラ黒き翼によって肅正さ
れたからだ。

それはさて置き、俺はそれら全ての誘いを断わり、父様から貰ったシエラ号を使って父と同じ義空賊団をすることにした。ちなみに名前は白き翼。アラアルバ

名前を付けてくれたのは父様だった。“いずれ、俺ら黒き翼アラニグラと対等な存在になれる様に”という願いが込められた名前だ。俺にとって誇りでもある。

中立同盟国家から煌珠人完全保護協会・アークエイルの会長を務めて欲しい、という要請があった時はそれもいいかもと思ったけど、それ以上に世界を見て回りたいという気持ちから俺は義空賊になることを決めた。

このことに関して、白き翼アラアルバのメンバーは全員が賛成してくれた。特にコタローなんかはノリノリで、“親父と同じ道…、最高やないかい！”と言ったくらいだ。

……さて、そろそろ現実逃避は止めて目の前の事実と向き合おうか。ついさっきまで俺はフェイトとお茶をしていた。まあ、お茶と言っても俺は紅茶でフェイトは珈琲だったんだが……。

そのお茶会をしてる最中に何か分からんが、俺の目の前に光る鏡の様なものが見えたんだ。

取り敢えず、害がある様なものではなさそうだったので、興味本位で鏡面に触ってみたんだが、そのせいで俺は現実逃避をしたくなる様な現状になった。

気が付いたら草原のど真ん中にいたんだ。何を言ってるのか分かん

ないかもしれないけど、俺にも何が起こったのか分からん。

いや、分からん訳ではないな。恐らく、転送魔法の一種だろう。あの鏡は触れた対象を転送する魔法具の一種だったんだろう。

さて……。そんなことより、まずはここがどこなのかを知るべきか。遠目だが、少し離れた所に石造建築物があるな。

けど、あんな城っぽい石造建造物の周辺に自然そのままの草原が残ってる所なんてあったか？少なくとも旧世界には無いな。

城っぽい建造物なんて観光名所としてはうってつけだ。その周辺となれば道路なんかの公共設備が整備される筈だ。

ムンドウス・マギクス
なら、魔法世界のどこかか？まあ、俺も魔法世界の全てを把握してる訳じゃないからな。

詳しいことは目の前のちよつと頭部が淋しい男性と、アホ面を晒してるマント集団から聞けばいいか？

……それにしても、ここは自然エネルギー……？空間魔力？が多いな。今の魔法世界は？空間魔力？の量はどこも大体は同じ筈だが……。

ま、父様から教わった？空間魔力？の活用法——『仙人モード』ならぬ『仙忍モード』が使い易くなるからいいか。

……それじゃあ、そろそろ目の前の連中にここが何処か聞きますか。そう思った俺が口を開こうとした瞬間、目の前のマント集団がざわつき始めた。

「おい…、ゼロのルイズが成功させたぞ……」

「成功なのか？成功って言うのか、アレ？」

「確かに、な。なんとって人間だし……、それに変な靴は履いてるし……」

変な靴とは何だ！変な靴とは！！これは父様が魔法世界ムンドウス・マギクスの技術を使って作り上げた魔法具マジックアイテム、A・Tだぞ！！

通常A・Tで市場価格が1万ドラクマ！一般家庭が36日前後遊んで暮らせるだけの価値があるんだ！！

俺のはA・Tの中でも最高峰。8つしか存在しない玉璽レガリアの称号を持つものだ。市場に出せば最低でも100万ドラクマはいく代物なんだぞ！！

俺が心の中でそう憤慨していると、今度は別の奴らの会話が聞こえてきた。

「でも、平民って訳でもなさそうよ？だって、着てる服は金細工や金糸の刺繍が施された立派な物だもの。どこかの貴族の子息かもしれないわ」

「確かに……。あんな見事な装飾が施された服を平民が買える訳ないしな。しかも、俺達メイジを前にあの堂々とした態度なんか、俺達より身分の高い立場としか思えない」

「なら、ルイズが『サモン・サーヴァント』を使った時に偶々『飛翔ライ』で通り掛かったメイジが落下してきたって可能性があるな」

メイジ？メイジって何だ？もしかして魔法使いのことか？魔法使いをそんな呼び方する奴らなんて魔法世界にいたか？

……いやいや。俺が知らないだけでいるかもしれない。一般的にはマジック・ユーザー魔法使いや西洋魔術師、東洋魔術師、魔導師なんて呼ばれ方が多いが、きつとメイジって呼び方がマイナーなだけだ。

俺は自身の現状や周りの会話から1つの答えに辿り着きそうになったが、それを否定した。俺が悶々としてる最中、俺の周辺にいるマント集団は珍獣でも見る様な視線を俺に向けてくる。

そして、そんな中ちょっと頭部が淋しい男性が俺の方へと近付いて来て口を開いた。

「考え事をしている処、悪いのだが……。少し、いいかね？」

ちよつと頭部が淋しい男性が話しかけてきたので、俺は男性の方へと向き直った。そして――

「…………構わないですが、その前に自己紹介をして貰ってもいいですか？」

俺の問い掛けに対し、男性は嫌な顔ひとつせず、一度頭を下げてから口を開いた。

「これは申し訳ない。わたしはトリステイン魔法学院で教師を務めているジャンⅡコルベールと言う者だ」

トリステイン魔法学院？聞いたこと無いな……。取り敢えず、名乗られた以上、こっちも名乗り返すのが礼儀ってもんだ。

「俺はネギⅡスプリングフィールドです。一応、元煌珠人完全保護協会・アークエイルの特殊機動部隊・黒き翼に所属していた保護官です。」

もつとも、現在は白き翼のリーダーでしかないんですが……」

「エディル……？アークエイルですか？」

「あれ？ご存じありませんか？煌珠人を保護する国家機関なんです
が……」

「国家機関……ですか？というか、煌珠人とは一体？」

「……煌珠人もご存じない？」

「え、ええ。お恥ずかしいことだが、わたしは聞いたことが無い。
良ければ、どういった存在か教えて貰えないだろうか？」

「煌珠人は、見た目は我々と同じ人の姿なんです、ある特別な力
を持っている種属なんです」

「特別な力？」

「ええ。煌珠人はヒトと契約することでその身を武器へと変え、契
約者の力となる種属です」

「なんと！その様な存在がいたとは存じませんでした。もしや、亜
人やエルフの類ですか？」

「一応、分類的には亜人です。そして、煌珠人は女性のみで形成さ
れた種属であることや、絶大な力を持っていることから人間に狙わ

れることが多い。

故に、そんな彼女達を守る為に立ち上げられた組織が煌珠人^{エディルレイド}完全保護協会・アークエイルという訳です」

「成程……。つまり、アークエイルというのは煌珠人^{エディルレイド}という存在を守る魔法衛士隊の様なもので、保護官とは騎士の様なものという訳ですな」

「騎士という程上等なものではありませんが……」

「失礼ですが、アークエイルとはどれ程の規模の組織のですか？」

「そうですね。協会に属する人の数は保護官だけでなく、事務員も含めれば本部と全ての支部を合わせて10万人を超えます」

俺がそう答えると、目の前にいる――教師と言っていたからコルベール先生と呼ぼうか。コルベール先生とその生徒と思われるマント集団は一気にざわめき出した。

「10万人以上で構成された国家機関なんて聞いたことないぞ？」

「少なくともトリステインでは国家機関でもそれだけの人員を割り振るのは無理だな」

「ってことは、ロマリアかアルビオン辺りか？」

「お前、馬鹿か？アルビオンなんてトリステインより国土が狭いんだ。無理に決まってる！ロマリアもブリミル教の大元だぜ？亜人種を保護するなんて有り得ないって。」

一国家機関に10万人もの人員を割ける国なんて、ガリアかゲルマニア位しかないよ」

「私、ゲルマニアの出身だけどアークエイルなんて国家機関は聞いたこと無いわよ？……タバサはガリアの出身だったわね。聞いたことある？」

「無い……」

「ホントかい？キュルケ、タバサ？」

「嘘なんか吐いて、どうすんのよ？」

「ホント……」

「なら、どこの出身だよ？」

生徒達がらざわめいている中、コルベール先生が再び口を開き、質問を投げかけて来た。

「申し訳ないが、ミスタ・スプリングフィールドがどこの出身か教えて貰えないだろうか？」

「構わないが、そのやり取りに余り意味は無いかもしれない」

「どう言うことですか？」

俺の返答にコルベール先生は訝し気な顔になった。が、俺はそれを
ムンドウス・ウェムツネウス・マギクス
気にせず旧世界と魔法世界の国名をいくつか言うことにした。

「日本、イギリス、ウェスペルタティア王国、ヘラス帝国、アリアドネー中立国、アストレア王国、ゴールドソーサー。この中で聞き覚えのあるものはありますか？」

「……いいえ、ありません」

「俺もトリステイン、ロマリア、アルビオン、ゲルマニア、ガリアと言う国名は聞いたことがない。どうやら、俺は随分と遠い所に呼び出された様です」

「……………もしや、ロバ・アル・カリエ東の世界の出身ですか？」

ロバ・アル……？何だそれ？何か都合の良さそうな存在みたいだが……。取り敢えず、聞いてみるか。

ロバ・アル・カリイエ
「東の世界？」

「ええ。私達が現在いるトリステインを始め、ロマリア、アルビオン、ゲルマニア、ガリアといった国が既に開拓した領土全てを総称してハルケギニアと呼んでおりますな。

そして、ハルケギニアで信仰されておりますブリミル教では東の地に聖地があるとされているのです。

そして、その更に東に行った所にある地を私達はロバ・アル・カリイエ東の世界と呼んでいるのです」

この時、俺が考えないようにしていたことが確信へと変わった。こ
ムンドゥス・マギクス ムンドゥス・ウエトゥス
こは魔法世界と旧世界とも異なる異世界。

コルベール先生は遙か東方にある地をロバ・アル・カリイエ東の世界と言った。つまり、ここは西方にある地ということだ。

ムンドゥス・マギクス
魔法世界では地図を製作される際、中立同盟国家から旧ウエスペル
タティア王国の辺りが中央に配置される。

そしてその場合、西方の位置に来る一番大きな都市国家はアリアド
ムンドゥス・マギクス
ネー中立国だ。ここがもし魔法世界なら、これらがアリアドネーを
知らないのはおかしい訳だ。

一番現実であって欲しくないことに軽いショックを受けながらも、俺はそれを表に出すことなく口を開いた。

「……成程。俺も開拓されている領土から先へと行くことが殆ど無かったので断言はできないが……。恐らく、あなたの言う東の世界^{ロバ・アル・カリイエ}が俺の国なんだろう」

俺がそう答えると、コルベール先生は少し考え込む様な仕草をした後に1回だけ頷き、右手を差し出してきた。

「突然の来訪ですがトリステイン……。いや、ハルケギニアへようこそ」

俺は歓迎の言葉と同時に差し出された右手を握り、握手をした後に思っていたことを口にした。

「こちらこそ。いきなり他国……。それも遠方に来れるとは思ってもなかった。ところで先程、周辺の生徒らしき者達から聞こえてきた会話から察するにゼロのルイズとやらが俺を呼び出したようだな。その者は一体どういう用件で俺をこの様な遠方まで呼び出したのか、教えて頂けると嬉しいのだが……」

俺がそう言うと、コルベール先生の次に近くにいた桃色髪の少女が一瞬だが肩をビクリと震わせた。そして、コルベール先生はバツの悪そうな顔をしながら答えた。

「ミスタ・スプリングフィールド。実は今日はトリステイン魔法学院の生徒の進級を決める使い魔召喚の儀という儀式やっていたのです。そして、彼女が儀式を行ったら――」

「俺が召喚された、と?」

俺がそう口にすると、コルベール先生は頷いた。

「そういえばここに来る前……、友人とお茶をしていたら俺の前に光る鏡が現れたな。そして、興味本位で触れ、気が付いたらここにいた……」

確か、高さが2mで幅は1m程の光る鏡だったな。そんなことを思いながら1人で納得していると、コルベール先生が微妙な顔をしていた。

「ん? どうかしましたか?」

「ミスタ・スプリングフィールドはメイジではないのですか?」

「メイジ? こちらでは魔法を使う者のことをそう言うのか?」

俺がそう尋ねると、コルベール先生は頷いた。

「郷に入れば郷に従え、か。確かに、こちら風に言えば俺はメイジと言うことになりますね」

「ならば、『サモン・サーヴァント』を知っているのでは?」

「……確かに、俺は魔法を使えますが、そちらと同じ魔法体系と
思われては困ります。少なくとも、俺は『サモン・サーヴァント』
などと言う魔法は知らない」

「成程。確かに先住魔法というものもある位です。場所が違えば、
発展する魔法が違ってもおかしくはありませんな。」

そう言えば、ミスタ・スプリングフィールドは“こちら風に言えば
”と仰られましたが、そちらでは違うのですか？」

俺の答えにコルベール先生は納得した様に頷いた後、聞いてきた。

「俺の住んでいた所では魔法を使う者は魔導師、魔術師、魔法使い
などと、様々な呼び名で呼ばれています」

「何故、呼び名が違うのか聞いても良いですか？」

「別に構いません。そうですね、強いて言うなら強さの序列を現
すものといった所でしょうか？」

「強さの序列？」

「ええ。一般的に魔法を使える者は総じて魔法使いと呼ばれます。
そして、その中でも特に力の強い者は魔術師と呼ばれ、魔法行使者
の頂点とも呼べる遥か高みにいる者達は魔導師と呼ばれるんです」
「成程。つまり、ハルケギニアにおけるメイジのレベルの様なもの
ですな」

「あと、俺のいた所の魔法使いには面白い風習があるんです」

「面白い風習？」

俺が自分の世界の風習について口にするると、コルベール先生は食い
ついて来た。

「風習というか確言の様なものですな。 “ 術師よ。大衆の為に在れ ” という言葉でしてね。

私が所属していたアークエイルを立ち上げた人が広めた言葉で、今では魔法に携わる者にとってとって常識であり、プライドとなっているものです。

魔法などの特別な力を持つ者は力無き弱者の為に力を振え。例えば世界から悪の烙印を押された者であっても、その者が力無き弱者ならば助けてやれ、というものです」

少しだけ嘘を混じえつつ説明したが、別に構いはしないだろう。ちなみに、実際は魔法使い全ての常識ではなく、中立同盟国家に属する魔法使いにとっての常識だ。

「…… “ 術師よ。大衆の為に在れ ”、ですか。それが常識になっているとは、東方とは素晴らしい所ですな」

「そうですか？……ところで、できれば『サモン・サーヴァント』とやらの説明をして欲しいんですが……？」

「ああ！！そうですな。申し訳ない」

俺が『サモン・サーヴァント』の説明を促すと、コルベール先生は説明を始めてくれた。

第2話 「ルイズ、魔導騎士を得る」 (ルイズ視点) (前書き)

どうも、エミリアです。

えー、今回の話はネギのルーンが判明します。

という訳で、本編をどうぞ!!

第2話 「ルイズ、魔導騎士を得る」 （ルイズ視点）

トリスティン魔法学院において進級試験も兼ねた定例行事、春の使い魔召喚の儀式。

この儀式によって魔法学院の学生は自分の真の『系統』を見極め、より高度な知識と技術をその『系統』の専門教師から学んでいく。

それじゃあ、この使い魔召喚の儀式を失敗した者はどうなるか。当然、落第する。実技と筆記がどれだけ優秀でも例外は無い。これは実家がどれだけ身分の高い立場でも変わらない。

つまり、使い魔召喚の儀式を失敗すれば、いくら私がヴァリエール公爵家の三女という立場であっても落第することになる訳よ。

そして、私は自慢じゃないけど今まで魔法を成功させたことが無い。系統魔法は勿論、コモンマジックすら成功させたことが無い。

今までコモンマジックで使ったことの無いのは『サモン・サーヴァント』と『コントラクト・サーヴァント』だけ。

『サモン・サーヴァント』も失敗したら私はもう立ち直れないかもしれない。というか、もう実家に引っ込んで、どこかの家に嫁ぐまで暮らすしか無い。

という訳で、今回の使い魔召喚の儀式で使用する『サモン・サーヴァント』には、私が今まで生きてきた16年の人生で一番と言っている程の気合を入れていた。そして――

「ルイズ――ルイズⅡフランソワーズⅡルⅡブランⅡドⅡラⅡヴァリエール！」

「はい！」

ついに私の番が回って来た。私はコルベール先生の呼び掛けに応え、全員が儀式を行っていた位置に移動し、深呼吸をした後で詠唱を始めた。

「我が名はルイズⅡフランソワーズⅡルⅡブランⅡドⅡラⅡヴァリエール。5つの力を司るペンタゴン。

我の運命さだめに従いし、如何なるものにも屈さず、強く気高き魂を持ちし使い魔を召喚せよ！」

私が詠唱しながら杖を振うと、杖の先端が一瞬輝いた。すると、眩い閃光と共に爆発が起こり、その爆発によって土煙が舞い上がった。

それから暫らくすると徐々に土煙が治まり、爆心地に何かいることが視認できた。そして、土煙が晴れると、そこには1人の男がいた。

金の装飾が施された見慣れない服装で、赤茶の髪を果物の葉の様に纏めた独特の髪型をした男性。

服装から考えると平民では無さそう。というか、私ってば人間を召喚しちゃった。これって凄く拙いわよね!?

平民じゃないってことは貴族ってことだし。もし、この人が他国の貴族の子息なら外交問題に発展しちゃう!

というか、絶対貴族だわ。左頬に傷があるけど、それ以外は完全無欠!パーペキな容姿だわ!!

魔法学院の男子なんか彼と比べたら双月とオーク鬼よ。彼は他国の上級貴族か何かなんだわ!!

私がこんな感じでテンパってる間、赤毛の男性とコルベール先生は話していた様で、途中からだけどその会話が耳に入ってきた。

「—————周辺の生徒らしき者達から聞こえてきた会話から察するにゼロのルイズとやらが俺を呼び出したようだな。

その者は一体どういう用件で俺をこの様な遠方まで呼び出したのか、教えて頂けると嬉しいのだが……」

私はその言葉を聞いた時、体が震えた。頭の中でどれ程考えても罵倒され、罰せられる未来しか想像できなかったから。

そして、答えられない私に代わってコルベール先生が申し訳なさそうな顔で説明を始めた。

「ミスタ・スプリングフィールド。実は今日はトリステイン魔法学

院の生徒の進級を決める使い魔召喚の儀という儀式やっていたのです。そして、彼女が儀式を行ったら――」

「俺が召喚された、と？」

赤毛の男性――ミスタ・スプリングフィールドがそう口にする、コルベール先生は頷いた。すると、ミスタ・スプリングフィールドは顎の手を添え、召喚される前の状況を口にし始めた。

「そういえばここに来る前……、友人とお茶をしていたら俺の前に光る鏡が現れたな。そして、興味本位で触れ、気が付いたらここにいた……」

……え？ということは、ミスタは自分から私の召喚に応じたってこと？私の不安に少しの光明が射しこんだ。……そんな風に思った瞬間、時期が私にもありました。

どうやら、ミスタの住んでいた東の世界には『サモン・サーヴァント』が無いみたいです。ちなみに私がミスタの出身地を知ったのは、周りの生徒の会話からだったりする。

そして、ミスタはコルベール先生とハルケギニアと東の世界の違いについて少し語った後、『サモン・サーヴァント』について聞いてきた。

このことに関しては使い魔召喚の儀式の監督役であるコルベール先生がしてくれることになった。

「『サモン・サーヴァント』とは、使い魔を召喚する為の魔法――
ーコモンマジックです。」

召喚者と最も相性の合う生物の前に鏡を出現させ、その鏡を通して
来た生物に『コントラクト・サーヴァント』というコモンマジック
でルーンを刻み、使い魔とします。

これによって生徒達は己の今後の『系統』を固定し、それにより専
門課程へと進むのです」

「……ちなみに、進級がどうか言っていました……。もし、俺
が彼女とその『コントラクト・サーヴァント』と言うものをしなか
った場合、彼女はどのようなんですか？」

ミスタそう言うと、コルベール先生は困った顔を始めた。当然よ
ね。人間を召喚したなんて前例がないんだもの。

しかも、ロバ・アル・カリイエ東の世界から召喚するなんて……。そんなことを考えてる
と、コルベール先生が口を開いた。

「一度呼び出した使い魔は変更することはできません。なぜなら、
春の使い魔召喚は神聖な儀式だからです。」

ですから、あなたが彼女の使い魔になることを拒否されれば、彼女
は進級できなくなる……。かもしれない」

「かもしれない？」

ミスタは歯切れの悪い言い方をするコルベール先生に怪訝な顔で聞
き返した。

「いえ。何分、この使い魔召喚の儀で人が召喚された例と言うもの
がありませんので……………」

「ふむ……………」

私とコルベール先生のすぐ側でミスタは何か深く考え込み始めた。
普通なら考えるまでも無いことだ。

ロバ・アル・カリイエ
東の世界からやって来たといっても、立場は私達と同じメイジ。使
い魔なんかになってくれる訳がない。

コルベール先生もそう思っているから、先程から齒切れが悪いのだ
から。そんなことを考えてると、周りの生徒の声が聞こえてきた。

「ルイズの奴、落第確定か？」

「どうだろう？」

「相手は元とはいえ10万人以上の人員がいた国家機関に所属して
た人よ。しかも、特殊部隊所属って言ってたでしょ？使い魔なんか
になってくれる訳がないわ」

「確かに。それにあの人は人の下に就くより、人の上に立ってるイ
メージがあるな」

「じゃあ、二つ名はゼロのルイズ改め、ダブリのルイズ？」

「ってか、あの人がなってくれなきゃ、ずっと1年か、自主退学の
二択しかないよな」

あんた達、どんなに小声でも丸聞こえよ！！言いたい放題言っ
て！……………でも、当然よね。私がミスタと同じ立場でも、使い魔にな

ったりしないわ。

ああ……。さよなら、ゼロのルイズ。そして、こんにちは。ダブリのルイズ。私がそんなことを考えていると、ミスタから驚くべき言葉が聞こえてきた。

「いいですよ。彼女の使い魔になりましたよ」

一瞬、私の幻聴かと思ったけど、そうではないらしい。周りの皆も驚いている。

「よ、よろしいのですか？」

コルベール先生が皆を代表する様に聞いた。すると――

「俺も自分がいた所では教師をしていたことがありますからね。既に教職から引いた身ですが、留年すると聞いている気も引ける。

それに住んでいた所から大分離れた所に召喚され、右も左も分からない状況です。しかし、俺は人間だ。他の使い魔と同じ扱いをされずには堪ったものではありません。

彼女の客将扱いで衣食住と人としての自由を保証してくれるならば、使い魔のフリ位はしましょう。それがこっちの最低条件です。

衣食住の他に給料を払え、などと言う無茶振りもしません。それが嫌ならば、俺はここを離れさせて貰います」

例え、名目上であつても使い魔となってくれるなら、それに越したことはないわ。そんなことを考えてると、コルベール先生が口を開いた。

「少し待って貰えますかな？彼女と相談してきますので」
「構いませんよ」

コルベール先生はそう言うのと、ミスタはそう返答した。そして、コルベール先生は私の方へと近付いて来た。

「ミス・ヴァリエール。彼との会話は聞こえていましたか？」
「はい」

「では、彼の条件を飲み、使い魔と言う名目の客将とするか否か――」
「――」
「します!!」

私が即答すると、コルベール先生は少しの間を置いてから再度聞い
てきた。

「……本当に構わないのですね？」
「はい!!」
「……分かりました」

コルベール先生がそう言うのと、ミスタが声を掛けてきた。

「どうやら、決まったみたいですね」

「……ええ。では、ミスタ・スプリングフィールドにはミス・ヴァリエールと『コントラクト・サーヴァント』をして貰うことになります」

「では、早々に『コントラクト・サーヴァント』というのを済ませ、儀式を終了させましょうか。」

見た感じ、あと残っているのはミス・ヴァリエール……、でしたか？彼女だけの様ですし、早くしなければ次の授業にもいきようがでるでしょう？」

ミスタがそう言うのとコルベール先生は頷き、私に儀式の続きを促してきた。

「そうですね。では、ミス・ヴァリエール。儀式を続けなさい」
「はい」

私は返事をするミスタに近付き、契約する前に話し掛けた。

「私、あなたに感謝してる。でも、それとこれとは別だからね？というか、私の初めての相手になれたんだから、そっちも感謝してよ」

私はそう言い終わると、手に持った杖を軽く振り、『コントラクト・

サーヴァント』の詠唱をした。

「我が名はルイズⅡフランソワーズⅡルⅡブランⅡドⅡラⅡヴァリエール。5つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我が使い魔となせ」

そして、詠唱を終えた私はミスタの額に杖を1回置き、更に近付いた。すると、ミスタが動いたので、私は彼の頭を両手でがっちりと掴む。

「じっとしてて」

私はそう言い終えると、自身の唇をミスタの唇と重ねた。ミスタは少し驚いた顔をしており、私は彼から唇を離すとコルベール先生の方へと向き直り、契約終了の報告をする。

「終わりました」

「……うむ。『コントラクト・サーヴァント』はきちんできたね」

私の報告にコルベール先生が嬉しそうにそう言い終えた直後、ミスタから軽い呻き声の様なものが聞こえた。

「ぐっ！！?」

多分、使い魔のルーンが刻まれる影響ね。本来は幻獣や動物に刻まれるもので、人間に刻まれることは想定されてないだろうから……。

一般的な使い魔にルーンが刻まれるのに掛かる時間は十数秒。ルーンそのものには害は無い筈だから、言っておかないと……。

「使い魔のルーンが刻まれてるの。長くてもあと数秒で済むから筈だから、もう少しだけ我慢して」

私はミスタにそう言うと、その2〜3秒後にはミスタの左手の甲にルーンが現れた。

私がミスタの左手のルーンを見つめていると、コルベール先生が近付いて来て、ミスタのルーンを凝視した。

「……珍しいルーンだ」

「そうなんですか？俺が住んでいた所とは術式が違う様なんで、俺にはよく分かりませんが……」

ミスタはそう言い終えると、コルベール先生と同じ様に自分の左手に刻まれたルーンを凝視し始めた。

「ああ。今までに見たことがないルーンだが……、どうかしたのかね？」

「……いえ。特にどうしたという訳ではありません。ただ、人間を使い魔にした例がないと言ったので、体にルーンによる何かしらの影響があると思ってたんです。」

でも、今の処は不都合らしきものも無い。……ちなみに、このルーンを刻むという行為に何か意味はあるんですか？」

ミスタガがそう尋ねると、コルベール先生は一度頷いてから説明を始めた。

「そうですね。このルーンはメイジと使い魔の絆だとされています。ミスタ・スプリングフィールドは客將的立場ですから、契約の証と考えるといいですな。」

あとの詳しいことなどはミス・ヴァリエールに聞いて貰えると助かるのだが……」

「分かりました。……詳しいことは後々に彼女に聞くことにします。それより、召喚の儀も全員終了してるんでしたら、魔法学院とやらに戻った方が良いのでは？」

本日の授業も、この使い魔召喚の儀式だけという訳ではないでしょう？」

「ああ、そうでした。次の授業が始まるまでに戻らなければ……。皆さん、教室に戻りますぞ」

ミスタに促されて相槌を打ったコルベール先生は、系統魔法である『飛翔^{フライ}』を使い学院へと飛んで行った。他の皆も先生に続く様に一斉に飛んで行く。

「ルイズ、お前は歩いて来いよ！」

「あいつは『飛翔』^{フライ}はおろか、『浮遊』^{レビテーション}もまともにできないんだぜ」

口々にそう言って笑いながら、学園の方に向い飛んで行った。あいつら、後で覚えときなさい……。そんなことを思っていると、ミスタが話し掛けてきた。

「君は飛べないのか？あー……」

ミスタはそう言うのと、急に言い淀んだ。そういえば、ちゃんとした自己紹介はしてなかったわ。

「私はルイズ。ルイズⅡフランソワズⅡルⅡブランⅡドⅡラⅡヴァリエール。トリステイン王国、ラⅡヴァリエール公爵家の三女です」

「では、ルイズと呼んでいいか？」

「ええ、構いませんわ。ミスタ・スプリングー」

私はミスタ・スプリングフィールドと言おうとしたら止められた。

「ネギでいい。そんな堅苦しい呼び方されるのは慣れていない。あと、普段通りの喋り方をしてくれると助かるかな？何か無理をする感じがする」

確かに、公爵家の令嬢という立場柄、敬語とかを使うのは苦手だわ。ネギはそれに気付いて気を使ってくれたみたい。なら、お言葉に甘えようかな。

「なら、普段通りの話し方をさせて貰うわ。敬語は余り使ったことが無いから苦手だったの」

「それはなによりだ。さて――」

そう言うと、ネギは私の前で急に王族に忠誠を誓う騎士の様に跪いた。

「えっ…？」

「誓約の言葉だ。……我が名はエレメンタルマスター・ネギース
プリングフィールド。」

我、汝に騎士の誓約を立て、汝の騎士として戦うことを誓おう……。
我、汝に降り注ぐ厄災からその身を守る盾となり、汝に仇為す者を
斬り捨てる剣となることを誓おう。

今、この時を持って我が剣と翼を汝に預ける。我らが別たれるその
日まで、共にあらんことを……」

「……………」

私は声が出なかった。目の前の突然の出来事に混乱していたのかしら？ いえ、そうじゃなかった。

ただ、目の前の人に……、宣誓を行うネギの神聖さに、その余りの

美しさに私は言葉を失っていたの。

第2話 「ルイズ、魔導騎士を得る」 (ルイズ視点) (後書き)

という訳で、ネギのルーンはガンダールヴでした。

実はネギが魔法の使い手ということもあってミヨズニトニルンにしようとも思ってたんですが、クラスが魔法剣士であることや原作通りへの進め易さを考えた結果、ガンダールヴとさせていただきました。

やっぱり、シンプル イズ ベストですね。(笑)

今回は来月更新で、日付に関しては敢えて未定とさせていただきます。(何回更新するかも未定です(笑))

第3話 「虚無は異世界の魔法を知る」 (ネギ視点) (前書き)

こんばんは、エミリアです。

取り敢えず、第三話の完成です。

編集に10日も要しましたが、そのお陰で本文は一万字オーバー！
過去最長な気がします。

どうぞお楽しみ下さい！！

第3話 「虚無は異世界の魔法を知る」 (ネギ視点)

「誓約の言葉だ。……我が名はエレメンタルマスター・ネギース
プリングフィールド。」

我、汝に騎士の誓約を立て、汝の騎士として戦うことを誓おう……。
我、汝に降り注ぐ厄災からその身を守る盾となり、汝に仇^{あだな}為す者を
斬り捨てる剣となることを誓おう。

今、この時を持って我が剣と翼を汝に預ける。我らが別たれるその
日まで、共にあらんことを……」

俺が誓約の言葉を言い終え、顔を上げるとルイズは呆^{だま}っとして固ま
ってた。そして、このまま固まられててもなんなん、俺はルイズ
を覚醒させる為にそのデコにデコピンをかますことにした。

「……痛ッ!! な、何!?!」

無防備な所にいきなり与えられたデコピンという名の衝撃が相当痛
かったのか……。ルイズは涙目になりながら、おデコを抑えた。手
加減はしたつもりだったんだが……。

「呆けている君が悪い。次の授業があるんだろ? 早くしなければ、

遅刻するぞ」

「ここから学院までは結構離れてるから、どっちにしても次の授業には間に合わないわ」

「何で———そういえば、ルイズは飛べないんだったな。なら、俺が移動手段になってやる」

俺はルイズにそう言い終えると、ルイズに所謂姫抱っことと呼ばれる形で抱き上げた。何やらルイズの顔が紅潮し、身体を固くしてるが無視だ。

そして、俺はその状態のまま軽くステップする様に脚の運動をした後、コルベール先生とその生徒達が飛んで行った方向へと体を向けた。

距離にして約800mといった所か？そこには先行している者達の最後尾の姿が視認できた。

その更に先、ここかおよそ3km先といった所には石造りの建造物がある。恐らく、そこがコルベール先生の言っていた魔法学院だろう。

取り敢えず、『縮地』を使えば余裕で追いつく———ってか、追い抜けるな。という訳で、出発する前に俺はルイズに話し掛けた。

「俺が抱き上げてる限り、振り落とされることはない。が、かなりの速度が出るから舌を噛まない様にだけはしろよ？」

「えっ？ちょっと、どう言う———」

ルイズが何かを言い出す前に俺は出発した。ぶっちゃけるなら、ただ走ってるだけなんだが、かなりの速度が出ている為、風を切っている感じがして最高に気持ちいい。

……いつからか忘れたが走るにせよ、飛ぶにせよ、こんなことを思う様になった。このせいでアスナさん達にはスピード狂と呼ばれる様になった。

ちなみに『縮地』には2種類の歩法が存在する。1つは足に？魔力？か？氣？を集中させ、直線距離を高速移動するタイプ。もう1つは純粹な脚力で空間的に高速移動するタイプ。

ちなみに前者の場合、体の表面に『対物・耐圧魔法障壁』が自動で展開されるので風を感じることはない。

つまり、俺が今使用してる縮地は後者ってことだ。後者は体力の消費が激しいけど、移動の手段としては最高だと思う。……風を感じられるし。

そんなことを考えていると、いつの間にかコルベール先生達に追い付き、一瞬で追い抜いた。追い抜いた後、後方から騒ぎ声っぽいものが聞こえた様な気がするが、氣のせいだろう。

そして、あつという間に俺達は目的の場所である魔法学院っぽい建築物の門の前に着いた。

「ルイズ。ここが魔法学院か？」

「……………」

俺はルイズに尋ねるが反応がない。おかしく思っ、もう一度声を掛けながら顔を覗き込んでみると――――

「ルイズ？」

ルイズは目を回しながら、泡を吹いて気絶していた。恐らく、『縮地』の速さに耐え切れなかったんだろう。

はっきり言って少女にあるまじき姿だ。唯一の救いがあるならば、失禁してないことだろうか？　っというか――――

「……あの程度の速度で気絶するか、普通？」

アーニヤやのどかさんにも同じことをしたことあるけど、気絶しなかったぞ？　そんなことを俺は思った。

取り敢えず、ルイズをこのまま放置する訳にもいかないんで、途中で追い抜いたコルベール先生達が来るのを待つことにした。

そして、コルベール先生合流後にルイズの状態を説明した上で、彼女が現在住んでいるという学生寮の部屋まで案内して貰った。

ちなみに学生寮の部屋まで案内してくれたのはコルベール先生ではなく、コルベール先生が紹介してくれた寮長を務めている教師だった。

ルイズを部屋まで送り届けた後、再びコルベール先生に会いに行き、召喚の儀の後にルイズが受講する予定だった抗議を公欠扱いして貰う様に交渉しに行った。

で、この時についてに聞いたんだけど、ハルケギニアには身体強化や結界、『魔法障壁』といった術が存在しないらしい。全く以て不便だ、と思った。

……9時間半後。燭光^{しかり}に照らされる部屋の中、懷から金時計を取り出した俺は針によって示された時間を見た。

現在は午後7…30。既に外は真っ暗になってるが、ルイズは未だに起きない。ってか、この子は一体どれだけ寝る気だ？寝る子は育つというけど、昼寝の領域を超えてる。

ちなみに金時計の時間はこの世界に合わせてたりする。時間の調整に時間を司る精霊の力を借りたりしたから、コンマ単位でも狂いは無い筈だ。

ああ。言い忘れてたけど9時間半もの間、ずっとルイズの様子を見てたって訳じゃないぞ。コルベール先生の許可を得られた範囲のみだが、学院内を見回ったりしていた。

学院の最高責任者である学院長と交渉すれば、もっと色々と見回ることが出来るそうなんだが、流石に最高責任者との交渉ともなれば、主であるルイズにも同伴して貰うべきと考え、コルベール先生が許可できる範囲のみを見回ったって訳だ。

っと、こんな説明をしてる間にルイズが身動き^{みじろ}し始めた。この9時間半、全く身動き一つ無かったからな。もしかしたら起きる前兆か

もしれない。

取り敢えず、学院お抱えのメイドに頼んで部屋まで運んで貰った個人用の夕食の準備をしとくか。

ま、準備と言ってもワゴンに置かれてる夕食に冷蔵庫代わりに掛けた氷属性魔法を解いて、火属性魔法の応用で温めるだけなんだけど……。

この世界は技術レベルが家内制手工業レベルみたいで、冷蔵庫も電子レンジも無い。だから、調理後の食品を保存する場合は家電製品代わりに魔法を使うしかないって訳だ。

もつとも、この世界で魔法をそんな風に使う奴は他にはいないだろうけどな。ってか、俺も始めてだし。魔法を家電製品代わりに使ったの。

……まあ、こんな感じで軽く心の中で愚痴り、魔法を家電製品代わりにしながら身動きを続けるルイズを眺めると、俺の予想通りにゆっくりとだがルイズは寝ているベッドから上体を起こした。

寝起きのせいかルイズはぼーっとした状態で、何故か窓の方に視線を向けて見ていた。すると、立ち眩みでも起こしたのか急に倒れ込んだ。

ま、この時の救いはベッドから転がり落ちなかったことだろう。……取り敢えず、声を掛けるか。

「随分と遅いお目覚めですが、ご機嫌いかがでしょうか？ お嬢様」

俺がそう口にすると、ルイズは油の切れた先行者の様に俺の方を向いた。ちなみに、先行者は首が動かなかったと思うが飽く迄も比喩表現だから、その点は理解してくれ。

……さて。それじゃあ、まずは軽い言葉の『無空波』から繰り出しますか。え？それは奥義だろ、って？ボク、ナニモキコエナ―イ。

（笑）

「9時間半も眠れば、さぞ爽快目覚めだろう。……ちなみにメイジとやらは、全員があ程度の速度で気絶する脆弱な存在なのか？」

俺が軽く嫌味っぽい感じでそう言うと、ルイズは顔を赤くさせながら口を開いた。

「あの程度、ですって？どこの世界に馬より速く走れる人間がいるって言うのよ！何の心の準備もなく、あんな体験させられたら誰だって気絶するわよ！！」

おおー！ルイズお嬢様はかなりご立腹の様だ。顔が赤いのは怒ってるからだな。取り敢えず、事実を話してやるか。

「俺のいた所では魔法戦闘の際、あれ以上の速度で戦うのが普通だぞ。だから、あの程度で気絶したり、驚いたりするメイジという存

在に呆れただけだ」

実際、？魔力？や？氣？を用いた『瞬動術』や、？チャクラ？を使った『瞬身の術』は純粋な身体能力版『縮地』や『活歩』とは比べ物にならないからな。

と言っても、身体能力版『縮地』や『活歩』も常人からすれば驚異的なもんだ。身体強化の魔法が存在しないこの世界では特に顕著なものな。

それを証明する様に、目の前の桃髪寝坊助娘は“信じられない”と
ねぼすけいった顔で驚いてる。

「まあ、君達からすれば考えられないんだろうが、だからと言ってそこまで驚きを表に出すのはどうかと思うぞ。……取り敢えず、精神を落ち着かせる為に深呼吸をすることを勧める」

驚きっぷりが半端なかったこともあって、俺はかなり混乱しているのではと思い、落ち着く様に促してみた。

すると、ルイズは何故か顔を見るみる赤くさせ、まるで捲し立てる様に口を開いた。

「大きなお世話よ！！それに私は落ち着いてるわ。……私は貴族なのよ？貴族たる者、常に毅然と優雅たれを実践してるの。
だから、私が取り乱すことなんて在り得ないの！落ち着いてるのよ

「!! わかった!!?」

いや、そんな捲し立てる様に喋って、落ち着いてるとか言われても説得力は無いだろ。

ま、ここでそんなことを指摘したら更に五月蠅くなりそうだから指摘しないけど。という訳で――

「はいはい。君は取り乱してなんかいないよ。重要なことを2回も言ってる辺りからして取り乱していない」

ちょっと投遣りな感じで、更に微妙に可哀想な子を見る様な眼でそう言うのと、ルイズは額に青筋を浮かべながら、睨みつけて来た。が、噛み付いては来なかった。

「…分かればいいのよ。……それよりも聞きたいことがあるんだけど、いいかしら?」

ルイズは米神をヒクつかせながらそう言ってきた。……どうせ、“すっごくイラつくわね。でも、ここで怒ったりしたら相手の思う壺だわ”とか思ってた我慢してるんだろうな。

……ま、そんなことはどうでもいいか。それよりもルイズの聞いたいこととは何だ? そう思いながら俺は口を開いた。

「別に構わんが……。一体、何が聞きたいんだ？俺の家族構成か？」
「あなたの家族構成を知ってどうするのよ。私が知りたいのは気絶してから今に至るまでの経緯よ」

俺はルイズの予想もしてなかった質問に、顔には出さなかったが内心で凄く驚いた。

だって、見た目と声からしてツンデレ。しかも、公爵令嬢ともなれば我儘お嬢様つてのがデフォだろ？それが真面目発言すれば驚くわ。

大体、旧世界の一般的な学生でも、今回の様な思わぬハプニングで授業をサボったとしても気にしない筈だ。

ムンドゥス・ウェトゥス
気にする奴がいたら、そいつはいいんちよさん並の優等生だと思う。ってか、ルイズはそういった点ではいいちよさんと同じなのかもしれない。

ま、そんなことはどうでもいいので横に置いておくとして、俺は包み隠さずにここに至るまでの出来事を5分程で簡単に説明した。そして――

「へー。ちゃんとした対応を取ってくれたんだ。……処で少し気になってたんだけど、部屋の端に置かれてる蓋が被せられた2つのトレイが載ってるワゴンは何？」

「ああ。君が夕食の時間になっても起きる気配がなかったからな。学院の料理人に君の分の食事を別に用意してもらった。

その上、料理を腐らせない為に魔法を使って冷却しておいた。今は

主菜とパン、スープを魔法で温めてるけどな。
サラダやデザート、ワインは冷却を続行中だ。特にサラダは鮮度を保っておかないと美味しくないからな」

俺がそう告げると、ルイズは何故か驚いた顔をしていた。何をそんなに驚いてるんだか。そんな俺の疑問を解決したのはルイズだった。

「ロバ・アル・カリイエ東の世界の魔法って、そんなこともできるの？」

ああ。そういえば、俺が本当は異世界の人間だったのは知らないんだよな。……ま、当分の間は黙っとくか。ということで、俺はサラッと嘘を吐くことにした。

「発祥の地が異なれば術式も異なる。……ま、詳しい話は食後にでもしてやるから、先に飯を食っちゃえ」

「……それもそうね。詳しい話は食事の後でもできるし」

ルイズはそう言い終えると、ベッドから起き上がって部屋に置いてあるラウンドテーブルへと向かった。

そして、俺は魔法で冷やし&温め終えたサラダとワイン、スープ、パン、主菜をルイズの前に並べた。

一応、相手は少し前まで気絶して寝込んでた存在だからな。普段ならそんなことしないが、相手が病み上がりの場合はその位してやっ

てもいいだろう。

デザートに関しては食後が基本と判断し、冷却を続行。ちなみに俺が配膳をすると、ルイズは驚いた顔をした後に礼を言ってきた。…意外と素直な所がある様だ。

で、ルイズは椅子に座って食事を前にすると、両手を組んで祈りを捧げ始めた。多分、修道院の者が食事の前に神に祈りを捧げる的な感じの、この世界のマナーか何かなんだろう。

……数十分後。夕食とデザートを食べ終え、ルイズ（のお腹）が落ち着いた所で夕食と一緒に持って来て貰ってた紅茶セットの準備をする。

当然、ティーセットの温めもちゃんとした。これをしないと紅茶の風味が損なわれるからな。

そして、紅茶を2人分のカップに入れた俺は先程までルイズが夕食を取っていたテーブルに紅茶を置いた。

当然、蜜壺やレモン、ミルクなども準備済みだ。で、俺はルイズと対面する様に置かれた椅子へと腰を下ろし、紅茶に蜜とミルクを入れてから一口だけ口に含んでから、口を開いた。

「それじゃあ、互いの魔法について話そうか？」

「ええ。まずはこっち——ハルケギニアの魔法から説明した方がいいかしら？」

「いや…、まずはこちら——君達風^{ロバ・アル・カリイエ}に言うなら東の世界か？面倒だからこれからは東方と呼称しよう。で、東方の魔法から説明する。

質問があればその都度に聞いてくれ。あとで一氣に聞かれるのも面倒だから」

俺がそう告げるとルイズは頷き、俺の言葉を一言一句聞き逃さない様な真剣な顔になった。

「まず、東方の魔法は術者が杖などの魔法発動体を媒介に世界を構成するものに？魔力？や？氣？、あと術法を以って直接働きかけ、世界を構成する核に干渉し、従えさせるものだ」

俺が自分の魔法について最も基本的な説明をすると、早速ルイズが口を開いた。

「……？マリオク？や？キ？って、何？」

「魔法を行使する時に用いる力の源だ。？魔力？は精神エネルギーで、？氣？は身体エネルギーとも言う。こっちじゃ、別の名称なのか？」

「こっちでは魔法の力の源は？精神力？なのよ。つまり、精神エネルギーって言うてくれた方が分かり易かったかも。

……でも、？キ？っていうのは今一つ分らないわ。身体エネルギーってことは、体力とかそういうのと関係あるの？」

「……中々に鋭いな。身体エネルギーとは簡単に言うとは体力。厳密には生命力だな。つまり、？魔力？を消費すれば精神的な負担を受け、？氣？を消費すれば体力を消費するって訳だ」

「ハルケギニアには魔法の力の源は？精神力？しかないんだけど、東方にはそれが2種類あるってこと？」

「そういうことになるな。ま、魔力運用タイプと氣運用タイプの術者で戦闘スタイルが異なってくるから、君が思ってるほど便利でもないが……」

「どうということ？」

「魔力運用タイプの術者は遠距離砲撃みたいな魔法を多く使う。逆に氣運用タイプの術者は身体強化や近・中距離攻撃に特化した魔法を使うことが多い。」

つまり、どちらのエネルギー源も運用するのに得手不得手があるってことだ。ちなみに？魔力？と？氣？の両方を自在に運用できる魔法使いは多くない。

？魔力？や？氣？に関する説明はこの位か。本当はもっと複雑なんだが、そんな説明をし始めると明け方まで掛かって……」

「？マリオク？や？キ？の説明はもういいわ。他の説明を始めて」

俺が？魔力？や？氣？に関するより詳しい説明に掛かる所要時間を口にすると、ルイズに先を促された。ま、当然と言えば当然だな。

実際、？チャクラ？とかの説明にまで及ぶと自然エネルギーの話まで発展するから、ほぼ100%明日の朝日を拝むことになっただろう。という訳で、俺は次の解説を始めた。

「次は『属性』に関してだな。『属性』とはこっち風と言うなら『系統』に当たるだろう。基本となる『属性』は8つ。

火、水、風の3つの根源属性と、それらを統括する光。そして、氷、地、雷の3つの根源属性とそれらを統括する闇の合計8つが存在する」

俺が『属性』の数を口にするるとルイズは驚愕を露わにした。が、俺はそんなことを気にせず、説明を続ける。

「ちなみにこの8つは飽く迄基本であり、そこから派生した属性も多く存在する。例えば、地から派生した石属性や砂属性、闇から派生した影属性が代表的だ。

その他にも特殊な属性が多々存在するが、源流を辿れば必ず八属性のどれかに属するものだ。そして、ここからが君にとって面白い話だ」

「……何よ？」

「今日、召喚された時にした会話から察するに、俺はこの魔法使いは基本的に1つの『系統』しか扱えないと推測してる」

「……ま、大体は合ってるわね。魔法によっては別の『系統』と組み合わせることで発動するものもあるけど、得意とする『系統』は1つよ。それがどうしたの？」

「東方の魔法使いは複数の『属性』——つまり、『系統』を扱えるんだよ」

「なっ!？」

「人によって得手不得手があり、威力の強弱もそれに影響するが、最高位の魔法使いともなれば、どの『属性』であろうと威力に大した変化が無かったりする……」

ちなみに、複数の属性を扱う者が強者とは限らないぞ。一芸に突出しているということは、それを極限まで極めることができるということだし……」

確かに、多数の属性を扱える者は戦略性も富むもんだけど、“最高の百”でも“究極の一”に勝つことができないということは多々あるからな」

取り敢えず、『属性』に関する説明をし終えた。本来、ちゃんとした魔法講義なら属性魔法以外の基礎魔法や回復魔法との違いなんかもしなければならぬ。

あと、？チャクラ？の『性質変化』と陰陽の説明もすべきなんだが、これらとさっきの？魔力？、？氣？云々の説明を本格的に全部するとなると授業単位に換算して156時間も必要になる。

ま、寝ずに約七徹すればいいだけだが、1週間も休みなしに授業をできる様な奴はいないだろうし、それを受講できる奴もいないだろう。

さて、くだらない話は止めて最後に属性の優劣関係だけ話して終わるか。

「あと、『属性』には優劣関係ってのがある。例えば、火は水に弱いが風に強い。そして、風は火に弱いが雷に強いって感じだ」

俺はそう言いながら、紅茶を入れてる間にルイズに用意して貰った紙と羽ペンで優劣関係を書く。

ちなみに、どうして俺が異世界であるここの文字を書けるかという
と、ルイズが寝てる間に机の辺りを物色したからだ。

物色の理由はこの世界の共通語、もしくはこの国の公用語を知る為。
で、物色の際に見つけたノートで最低でもこの国で公用語は旧世界
におけるフランス語であることが判明。
ムンドゥス・ウエトゥス

俺は父様の教育で、何カ国かの言語を習得させられてたことがあり、その中にフランス語があった為、何とか書けるって訳だ。

ちなみに魔法属性優劣は水属性（優）↓（劣）火属性（優）↓（劣）風属性（優）↓（劣）雷属性（優）↓（劣）地属性（優）↓（劣）水属性（優）↓（劣）水属性……、って感じた。

光属性と闇属性は互いのみが相反する属性で、他の属性の影響を受け無かったりする。コンフリクト

…と、こんな感じで簡単な説明を終え、ルイズも大して質問をすることが無かった様なので、俺の魔法に関する質問は終了した。

こちらの質問が終了したってことは、次は当然こっち——ハルケギニアの魔法の説明が開始されることを意味する。ってな訳で説明スタート！！

「それじゃあ、まずはハルケギニアの魔法の力の源についてね。これはネギの所の力の源の説明の時に言ったけど、ハルケギニアでは？精神力？って言われてるわ。

東方風に言うなら？魔力？ね。……よくよく考えると？精神力？より？魔力？って言い方の方がカッコいいわね。ここから先、ハルケギニアの力の源も？魔力？って呼称するわ。

で、魔法を使えばハルケギニアの？魔力？も消費される。そして、睡眠や休息を取れば回復するものなのよ。この辺りに関しては東方と大して変わらないと思うんだけど……」

ルイズが少し自信なさ気にそう言って来たのに対し、俺は同じだと

返した。そして、説明は再開される。

「ハルケギニアの魔法は、ルーン詠唱で発動する系統魔法と、口語詠唱で発動するコモン・マジックの2種類が存在するの。系統については後で説明するから置いて、コモン・マジックの説明ね。コモン・マジックはメイジなら誰でも使える基本的な魔法なの。例えば、あなたを召喚した『サモン・サーヴァント』がコモンマジックに当たるわ。」

ちなみに、魔法を使うには魔法発動体である杖と？魔力？。そして、詠唱が必要になるわ。ま、その詠唱もコモン・マジックと系統魔法で変わるんだけど」

ルイズはそこまで一旦説明を終え、自分のカップに手を伸ばし、紅茶を口に含んだ。そういえば、ルイズは学生だったな。立場的に考えれば説明なども一苦労だろう。

が、ルイズは口に含んだ紅茶を飲み終えると、軽く息を吐いてから説明を再開した。

「次は『系統』についてね。ハルケギニアに存在する『系統』は火、水、土、風の合計4つ。そして、1人のメイジが得意とする『系統』は例外なく1つなの。」

東方風に言うなら一芸突出というものね。自分に与えられた『系統』を極限まで極めた“究極の一”。

そして、ハルケギニアの『系統』には東方のような優劣関係は無いの。その代わりに力の方向性みたいなのはあるけど……」

「方向性？」

「ええ。火は破壊特化型、水は回復寄りの汎用型、土は防御・創造特化型、風は攻防一体の汎用型といった感じで、『系統』によって力の方向性があるの。」

あとはメイジの魔法の技量・力量でレベルが決まるってこともハルケギニア特有かも……」

「メイジのレベル？」

「ええ。単一系統しか使えないメイジはドット。で、風＋水みたいに2つの『系統』を組み合わせることができるメイジはライン。

風×2＋水のように3つの『系統』を組み合わせられるとトライアングル。そして、風×4や風×3＋水のように4つの『系統』を組み合わせられるとスクウェアと呼ばれるの。

ちなみにスクウェアクラスのメイジがハルケギニアで最高位の魔法使いってことになるわ。……ここまでで何か質問はある？」

「……『コントラクト・サーヴァント』の時に“5つの力を司るペインタゴン” って言ってなかったか？」

俺は系統が4つと聞いた時から気になってたことをルイズに尋ねてみた。すると――

「今は失われた『系統』で虚無と言うのがあるの。始祖・ブリミルが使ったとされている幻の『系統』よ」

「成程、失われた『系統』も含めて5つか。5つの『系統』が存在していた時代から使い魔の召喚が行われていたなら、あの詠唱も納得だな」

「そういうこと。他に聞きたいことは？」

「使い魔について聞いてもいいか？一応、客将という立場だが、使い魔が基本的どんなことをするのか気になるからな」

「そうね……。一般的な使い魔は主人の目や耳になる能力を与えら

れるんだけど……」

「つまりは情報収集役って奴だな？」

「そんな処ね。でも、それは無いみたいね」

うーん……。仮契約をすれば念話が簡単にできる様になるから、耳になることはできるんだが……。

まあ、いいか。黙って置こう。俺がそんなことを考えているとは露知らず、ルイズは説明を続ける。

「次に挙げられるのは、主人の望む物を見付けて来ること。例えば秘薬ね」

「秘薬と言うのは？」

「特定の魔法に使用する触媒のことよ。でも、あなたは東方から来たみたいだし、こっちの秘薬なんか知らないわよね」

「そうだな。凶鑑などを用意してくれるならば、できんこともないと思うが……」

「あなたは客将なんだから、そこまで望まないわ。……そして、最大の役割は主人を守ることよ。

まあ、特殊部隊に所属してた経歴を考えると、一切問題は無いでしょうね」

「まあ、当然だろ。……そう言えば、ルイズの得意な『系統』は何だ？」

俺が何となしにそう問うと、ルイズは固まった。そして、少し狼狽しながら口を開いた。

「なっ！そんなこと、どうでもいいじゃない！」

「いや、良くないだろ。雇い主であるルイズの実力を知って置くのも客将としての俺の仕事だ」

俺がそう告げると、ルイズは聞こえるか聞こえないかの小声で答えた。

「——ない」

「は？全く聞こえなかったんだが？」

「——んない」

「……？もう少し大きな声で言ってくれ。何を言ってるのか分からん」

冗談抜きで聞こえないのでそう言うと、ルイズは大声で叫んだ。

「分かんないって言ってんのよ！いつも失敗して爆発ばかりしてるの！だから、二つ名もゼロなのよ！！悪いか！！？」

何故に逆ギレ？理不尽にも程があるだろ。というか——

「ゼロのルイズのゼロは二つ名だったのか？」

「そうよ！！魔法の成功率が0だから。……って、ゼロって言うな！！！」

「言い出したのは君だろ? ……まあ、落ち着け。失敗の理由は分かっているのか?」

「分かんないわよ!」

うーん……。俺が感じる限りじゃ、ルイズの魔力量はクソ親父と同じ位なんだけどな……。

でも、エヴァンジェリンさんも俺やこのかさんに“魔力量が膨大でも宝の持ち腐れだ”的なこと言ってたしな。

……いや、待てよ。普通に考えれば、魔法の失敗は魔力の霧散化によって何も起きないことじゃないのか?

取り敢えず、ルイズも平静を取り戻したみたいだし、いくつか質問してみるか。

「ルイズ。いくつか質問してもいいか?」

「……何よ?」

「どの『系統』の魔法を使っても爆発は起きるのか?」

俺のこの質問にルイズは俯きながら答えた。

「……そうよ」

「『サモン・サーヴァント』は1回で成功させたんだよな?」

「……ええ」

「つまり、『コントラクト・サーヴァント』では爆発は起きなかつ

たってことだよな」

「……!!!? そう言えば……、そうね」

「他の生徒も魔法に失敗すれば、爆発するのか？」

「………? いいえ。何も起きないわ」

「なら、君の魔法は爆発という形で発動しているだけなんじゃないか？」

「!!!?」

俺の指摘に、ルイズは“今、初めて気付いた”と言う顔をしている。そして、俺は最後の質問をする。

「これが最後の質問だ。君は虚無の『系統』を試したことはあるか？」

「……何言ってるのよ。虚無は幻の『系統』よ。どんな魔法だったのかすら今では謎なのよ」

「だが、4つの『系統』に当て嵌まらないならば、消去法で辿り着くのは虚無だけだろ」

いきなりのことで呆気にとられたらしく、ルイズは口を大きく開けていた。が、すぐに正気に戻り、俺の推論に対して反論してきた。

「……い、いきなり何言ってるのよ？ 伝説の『系統』よ？ 私がそんなのを使えるなんて……。そんな訳ないじゃない」

「飽く迄も可能性の話だ。当然、確証がある訳ではない。だが、逆に否定できるだけの確証もない。

ちなみに、君は何を根拠に自分が虚無の『系統』ではないと否定し

ている？」

「で、でもー!!」

「それに『コントラクト・サーヴァント』で“5つの力を司るペンタゴン”と言っていた。5つの力は火、風、土、水の他に虚無も含まれている。」

更にルイズ自身が自分の真の『系統』に気付いていなかった上、幻の『系統』で過去の情報も手に入りにくい。

なら、いくら魔法学院と言っても教えられる者もいなかっただろう？なら、今まで魔法が成功していなかったのも納得がいく」

「そんな……」

「飽く迄も、これは俺の仮説だ。だが、このことを知っているの、いないのでは、得られる結果に大きな差が生じる。まあ、頭の片隅に入れて置くに越したことはないな」

俺が言いたいことを言い終えると、ルイズは小さく頷いた。

「分かったわ」

そして、ルイズはそう言い終えると椅子から立ち上がり、ベッドへと向かって寝転んだ。そして――

「はぁ。今日は色々あったせいで疲れたわ」

「疲れた？9時間半も寝て置きながら？」

「煩い^{めんど}わね。誰のせいだと思ってるのよ？」

「……少なくとも俺のせいではないな。まあ、疲れているなら早々に寝た方が良いな。と言う訳で、さっさと寝ろ」

俺がそう言うのとルイズは急に起き上がり、三白眼とも言える目で俺を睨んで来た。

「——って」

「は？」

「——って」

「……？もう少し大きな声で言ってくれ」

……この遣り取り、激しくデジャヴを感じるぞ。そんなことを考えていると、ルイズが爆発した。

「寝間着に着替えるから、部屋から出ろって言ってるのよ！！」

成程、そう言うことか。しかし——

「安心しろ、俺は気にしない」

「——ッ！！？私が気にすんのよ！！」

ルイズにそう言われ、取り敢えず俺はルイズの全身を見回してみた。
そして——

「その幼児体型で？残念だが、俺はもう少し凹凸のある体型でなければ興奮できない」

どう考えても中学時代の夕映さん以下だ。最低でも当時の夕映さん位は無いと無理だ。（↑何気に夕映に失礼。b y^{エミリア}作者）

「なっ！！」

「軽い冗談だ、真に受けるな。しかし……、確かに嫁入り前の女性が無闇に人前で肌を晒すのは良くないな。

それは女性としての第一次防衛ラインでもある。外で待っているから着替え終わったら呼んでくれ」

俺はそう言い終えると、部屋から廊下へと出た。そして、扉を閉めると同時にルイズの怒声が聞こえた様な気がした。

……数分後。着替えを終えたルイズから入室を許可された俺は、ルイズに同じベッドで寝ることを勧められたがそれを断り、代わりに毛布を1枚借りて壁に背を預ける様に座り込み、深い眠りへと落ちていった。

第3話 「虚無は異世界の魔法を知る」 (ネギ視点) (後書き)

え、という訳で第3話でした。

魔法属性の優劣や設定はNARUTOの『性質変化』の設定とテイルズ・オブ・エターニアの晶霊設定をベースに書いてみました。(笑)

次の投稿は今月か、もしくは来月になるかもです。(取り敢えず、今月中にinネギまの最新話を投稿したいな)

そう言えば、原作者のヤマグチノボル氏が癌の手術で入院されていたのは、皆さんご存知でしたでしょうか？

私は最近まで全く知りませんでした。そして、つい4日程前に無事手術を終了された様です。ゼロ魔ファンにとってはとても素晴らしい朗報だと思います。

さて！世間話はこの位で終了して次回予告です。次回は初授業の話です。ネギがルイズを擁護します。お楽しみに！！(笑)

(私的にはその次の話の方が気合入ってますが……(笑))

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2051v/>

魔導の使い魔

2011年9月28日12時30分発行